

## 乳児にみられた腔ポリープの1例

聖マリアンナ医科大学泌尿器科学教室（主任：井上武夫教授）

高 橋 剛

## VAGINAL POLYP IN AN INFANT GIRL

Goh TAKAHASHI

*From the Department of Urology, St. Marianna University, School of Medicine  
(Director: Prof. T. Inoue)*

A case of vaginal polyp in an infant girl was presented. The tumor was polypoid shape and yellow so that it resembled sarcoma botryoides. Histopathological findings showed hamartomatous appearance with hemangiomatic portions in the stroma. For 5 years after simple resection, she has been well without recurrence.

**Key words:** Vaginal polyp, Sarcoma botryoides

## はじめに

小児の腔ポリープはかなり稀な疾患であるので何ら予備知識なしに症例に出会うと、その奇異な外観のため悪性の肉腫を思わせる。臨床的には良性のポリープである。小児の外陰部の腫瘍として泌尿器科医が遭遇する機会もあると考えられるが、今回その1症例を経験したので紹介したい。

## 症 例

患者 5カ月，女児

主訴：腔口の腫瘍

出生歴・既往歴・家族歴に特記することなし

現病歴：出生後特に異常なく、順調に発育していた。哺乳は良好で身長、体重も標準値であった。1977年12月末（4カ月時）腔口より肉片のようなものが出ているのに親が気付いたがすぐに還納したという。月齢5カ月になるとそれが常時出ているようになり、増大してきたようなので受診した。出血や疼痛はなかったという。

現症：体格、栄養とも良好な女児で、軀幹、四肢に異常を認めない。外陰部を観察すると腔口よりFig. 1に示すような黄赤色の細長い腫瘍が露出しており、茎や付着部は不明であった。腔口よりの露出部は長さ約3cmであった。

検査所見：末梢血、血液生化学検査所見；すべて

## 正常

静脈性腎盂造影、膀胱造影、異常なし

膀胱鏡所見：膀胱内は正常の内景であった。腔口より腔内へ膀胱鏡を挿入して観察すると、腫瘍は内方で細くなった茎をもち、腔口よりやや奥の右側腔壁に付着していた。

手術所見：腔口を開大して露出している腫瘍を引くと付着部がみえたので、腔壁に密接した部分で茎部を切断し、断端を止血縫合した。腔内部にそのほかの異常所見はみられなかった。

病理組織学的所見：摘出腫瘍はポリープ様で3.5×1.0×0.4 cm、一部表面にびらん部、凹凸不整部があるが、全体としてはなめらかで弾性軟であった（Fig. 2）。病理組織像では表層は角化扁平上皮で覆われ、間質は多数の血管増生を伴うfibromyxomatousな組織で構成されていた（Fig. 3）。一種のhamartomatous changeと考えられhemangiomatic fibromyxoid polypと診断された。悪性像はなかった。

予後：腫瘍切除後、定期的な経過観察のみを行っていた。切除創治癒後は出血、腫瘍再発などはみられず、5年間観察したが何ら異常を認めていない。

## 考 察

本症の特長を要約すると次の4点になる。

(1) 外観上ぶどう状肉腫と類似しているので注意を要すること。



Fig. 1. Appearance of vaginal polyp before resection.

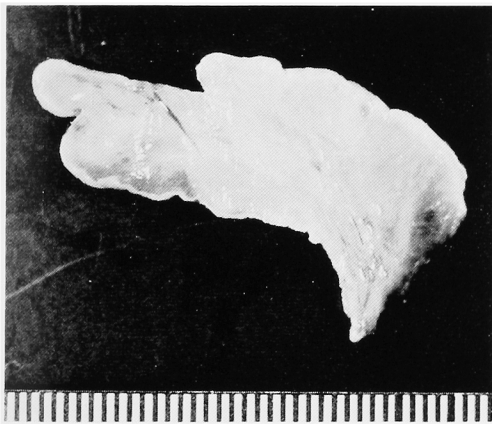


Fig. 2. Resected specimen demonstrating narrow stalk.

- (2) 発症年齢は乳幼児か20歳以上であること
- (3) 切除のみで治癒し、再発、悪性化はないこと
- (4) 組織像は2種類に分けられるが、ときに過誤腫的な所見や、異型細胞がみられる。

(1)について外観上肉腫状の様相があり、いかにも悪性を思わせることが多い。したがってぶどう状肉腫(sarcoma botryoides)に代表される横紋筋肉腫などと鑑別するためには組織診断を待たねばならない。また尿管瘤の尿道外脱出も鑑別を要する。ぶどう状肉腫はその名が示すようにポリープ状の外観を呈し、きわめて悪性であるので、その予後は本症とおおいに異なる<sup>1)</sup>。

(2)について、成人例7例をまとめた報告<sup>2)</sup>では年齢分布は17～52歳(平均32歳)であり、小児例9例<sup>3)</sup>では生下時～5歳(平均8日)となり、10歳前後～思春

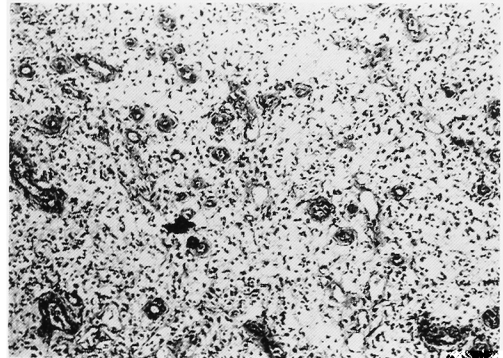


Fig. 3. Light photomicrograph of the polyp showing fibromyxomatous tissue with numerous small caliber vessels.

期は少ないようである。

(3)について報告例でみるかぎり単純に切除のみを行なっており1例を除いて再発例はない。生検のみで消失したとの報告もある<sup>2)</sup>。本症では間質細胞に異型性をみたとの報告<sup>4)</sup>もあるが、臨床的にはまったく良性と考えてよい。自験例も5年の経過をみているが再発はなかった。

(4)について、Miettinen<sup>4)</sup>は本症の組織像を大きく rhabdomyoma と fibroepithelial polyp に分けている。中腎(mesonephros)の遺残から発生したものと考へて mesonephric papilloma と名付ける場合もあるようである<sup>3)</sup>。いずれの場合も上皮は円柱または扁平上皮からなり、間質は正常の線維芽細胞が主体となり粗な結合織を構成し、そのなかに横紋筋線維や血管腫あるいは過誤腫様所見がみられる<sup>5)</sup>。また、ときには少数のクロマチンに富んだ異型性細胞や分裂像を認めたとの報告もある<sup>4)</sup>。

## おわりに

乳児にみられた腔ポリープについて報告した。本症は腔に発生する横紋筋肉腫に外観上類似しているが、良性腫瘍であって単純に切除するのみで治癒する。女児の外陰部を診察するうえで念頭に入れておくべき疾患といえよう。(本症例は筆者の前任地である静岡県立こども病院にて経験したものであることを付記します)

恩師井上武夫教授の御校閲に感謝いたします。

## 文 献

- 1) 秦 温信・内野純一・坂本 仁：小児期腔横紋筋肉腫. 小児外科・内科 8: 1033～1038, 1976
- 2) Norris HJ and Taylor HB: Polyps of the vagina. Cancer 19: 227～232, 1966

- 3) Janovski NA, Kasdon EJ: Benign mesonephric papillary and polypoid tumors of the cervix in childhood. *J. Pediatr* **63**: 211~216, 1963
- 4) Miettinen M, Wahlström T, Vesternen E and Saksela E: Vaginal polyps with pseudo-sarcomatous features. *Cancer* **51**: 1148~1151 1983
- 5) 大島泰之・大谷則史・田中一馬・鮫島夏樹・藤田昌宏: 鎖肛を合併した新生児腔ポリープの1例. *日小外誌* **20**: 1398~1402, 1984  
(1986年7月18日受付)